

i α ppli Development Kit
for DoJa2.1 (FOMA)
1.00 版
リリースノート

平成 14 年 12 月 17 日
株式会社 NTTドコモ

1.はじめに

このリリースノートでは、iappli Development Kit for DoJa2.1 (FOMA) 1.00版の概要と制限事項について説明します。

1.1 機能

本ツールは、DoJa2.1 Javaアプリケーション実行環境をWindows98/2000上でエミュレートする機能と、その上で動作するiアプリの開発環境としての機能を持つソフトウェアです。

1.2 制限事項

「iappli Development Kit」の赤外線によるOBEX通信は、Windows98ではirxfer.exeを、Windows2000ではirmon.dllを利用しています。このため、「iappli Development Kit」と移動機間での赤外線によるOBEX通信はできません。なお、「iappli Development Kit」同士の赤外線によるOBEX通信は可能です。

同じPCにDoJa2.0(504iシリーズ)向けツールと本ツールをインストールしたとき、双方のツールがWindowsレジストリを共有することから、以下の設定が共有されます。

- ・「その他」 - 「ネットワーク設定」メニュー
 - UserAgent
 - HTTP設定のプロキシホスト、プロキシポート
 - HTTPS設定のプロキシホスト、プロキシポート
 - OBEX設定のホスト
- ・「端末」メニューのデバイス設定

また、双方のツールはForteモジュールを同じ構成としていることから共存できません。後からインストールしたモジュールが有効になります。

2.実行方法

dojaコマンドは、大きく分けて2とおりの起動方法があります。一つはiappliツールと呼ばれる開発ツールから起動する方法で、もう一つは、iアプリを単体で起動する方法です。

2.1 iappli ツール

コマンド行引数なしでdoja.exeを実行すると、iappliToolと呼ばれる開発ツールが起動します。

2.2 単体起動

コマンドラインから、

```
doja -i ADFファイル
```

を実行すると、ADFファイルを読み込み、ADFファイルと同じディレクトリにJARファイルがダウンロードされたとして、iアプリケーションが実行されます。

例：

```
doja -i tetris.jam
```

また、このバージョンでは、通常のkvm.exeと同じようにクラス名を指定してmainメソッドから実行を開始することもできます。

```
doja -classpath クラスパス クラス名
```

または

```
doja クラス名
```

例：

```
doja -classpath test TestCanvas
```

doja.exeでは次のようなオプションを指定できます。

- ・ -s スキン名
- ・ -mx ヒープサイズ
- ・ -version
- ・ -help

doja_g.exeでは、さらに次のデバッグ用オプションも指定できます。

- ・ -traceallocation
- ・ -tracegc
- ・ -tracegcverbose
- ・ -traceclassloading
- ・ -traceclassloadingverbose
- ・ -traceverifier
- ・ -tracestackmaps
- ・ -tracebytecodes
- ・ -tracemethods
- ・ -tracemethodsverbose
- ・ -tracestackchunks
- ・ -traceframes
- ・ -traceexceptions
- ・ -traceevents
- ・ -tracemonitors

- -tracethreading
- -tracenetworking
- -traceall